

舞台は世界だ!

Go! Global

2014 KGM
グローバル人材
育成プログラム
レポート Vol.3



**KANTO GAKUIN MUTSUURA
JUNIOR&SENIOR HIGH SCHOOL**

ますます進むグローバル化は、加速するボーダーレス化とも言えます。中高一貫校での6年間は、入学から10年後、さらには20年後の社会を見据えて準備する大切な時と場です。ボーダーレスに向かう社会を早期に意識し体験する学習環境づくり。関東学院六浦は60周年を迎えた今、「若く純粋な想いを道へ……将来を世界に繋ぐこと」が新たな使命と考えています。



何をするかの話し合いからスタート

本校では、校訓「人になれ 奉仕せよ」をグローバル社会で実践していこうと、今年度より「カンボジア サービス・ラーニング研修」をスタートさせました。第1回目の参加者は、中学生3名、高校生7名、教員3名の13名。現地の小学校・中学校・高校を訪問し、「カンボジアの子どもたちに喜んでもらうにはどうしたらいいのか」を考えながら、教育ボランティア活動をしてきました。

まずはどのような活動をするのか、生徒たちは積極的に意見を出し合い、話し合いを重ねて準備をし

ました。中でも全校生徒に呼びかけて準備したことは、文房具類の寄付を募ることでした。カンボジアの学校は、まだまだ裕福とはいえない状況があります。電気が通っていない暗い教室、水道の整備がされていないトイレ、整地されていないグラウンド。さらにノートやペンも揃っていない子どもたちが多くいます。生徒たちは、実際に現地を訪問し、日本との違いを感じ、その違いを受け入れながらの日々でした。

交流した子どもたちは、私たちのつたない英語やクメール語を理解しようとしてくれ、本校生徒たちは「言葉が通じた」と感じたとき、本当に嬉しかったと話していました。簡単には意思疎通のできない環境で、生徒たちは少しずつ人間と人間の関係作りを学んでいるのだと思います。現地で使われている言語を流暢に話せるからといって、グローバル社会で活躍できるわけではありません。生徒たちはこのカンボジアの地で、分からないながらもジェスチャーや表情などでコミュニケーションをとり、相手と関わりたいという気持ちさえあればお互いを理解し

あえることを体験できました。

世界地図パズルで大盛り上がり

教育ボランティアのメインイベントは、小学校での運動会です。生徒たちは各種目を始める前に子どもたちにお手本を見せたり、一等でゴールした子どもを誘導したりと大忙しでした。日差しの厳しい中でしたが、現地の小学生のために一つひとつの種目がしっかりと行われるように本当によく働きました。生徒たちはその状況下で、自分に今何ができるか、何が必要とされているかを考える機会が与えられたと思います。また、出発前から準備してきた世界地図パズルや毛糸での人形作り、けん玉や折り紙は、現地の子どもたちにとって非常に魅力的だったようで、どの活動にも一生懸命取り組み、楽しんでくれました。特に世界地図パズルはいくつかのチームに分かれて競争したので、完成させたときの子どもたちの笑顔、大きな歓声は印象的でした。

交流の最後に、寄付して頂いた鉛筆などの文房具類を子どもたちにプレゼントしました。子どもたちは目をキラキラさせながら一つひとつ手にとって、嬉しそうに抱えていました。私たち日本人にとっては当たり前のことが、カンボジアではそうではないこと。日本と比べると物質的にまだ満たされていないながらも、何事にも一生懸命に取り組み、満面の笑みで嬉しそうにプレゼントを受け取る子どもたちは、私たちに大切なことを伝えてくれたと思います。

マンツーマンでの充実した授業

生徒45名と保護者5名の参加で初めて実施されたセブ島語学研修。期待と不安に胸を膨らませながら成田から飛び立った生徒たちは、多くが初めての海外という緊張の中、無事セブ島に到着しました。長旅で疲れた身体に現地の甘いマンゴージュースのお出迎えはとてうれしかったです。

「フィリピンの生活は、日本と異なり、不便な点が多くある。宿泊する間に、『どうしてフィリピンは日本と違って不便なんだろう?』という疑問を真剣に考えてほしい。ただの不満で終わらすのではなく、そこから見えるこの国が抱える問題にも目を向けながら、世界の様々な面を、実体験を通して学んでほしい。そして、英語学習に精を出し、実際にフィリピンの先生たちに色々質問をしてほしい。」1週間お世話になる語学学校の先生からの熱い励ましの言葉を胸に、生徒たちは翌日からの講習に備え就寝しました。(水圧の弱いシャワーと格闘しながらの入浴という試練もありましたが…)

翌朝、生徒全員がレベルチェックテストを受験しました。文法、リーディング、リスニングに加え、スピーキングのテストです。これからの英語力には「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能が大切です。生徒たちはそれぞれのレベルで頑張っており取り組んでいましたが、スピーキングのテストでは、先生の言っている内容に対して上手く返答ができず、悔しい思いをした生徒もいたようです。午後からはさっそく2時間

のマンツーマン授業を体験。「果たして、自分は、50分間も英語で話すことができるのだろうか?」と、授業前は心配そうな面持ちで教室に入っていた生徒たちも、授業を終えて教室を出ると、目を輝かせながら、「マンツーマン授業がとて楽しくて、時間が過ぎるのがあつという間でした。明日からも授業が楽しみです!」と顔を綻ばせながら感想を報告してくれました。

とにかく明るいフィリピンの先生

フィリピンの先生方はとにかく明るく、フレンドリーに話をしてくださり、さらに相手から話を引き出すことがとても上手です。おかげで英語力にあまり自信のない生徒でも積極的に質問し、先生と英語で交流することができるようになりました。授業で自分の英語が伝わったことが余程うれしかったのか、休み時間のカフェテリアでは自習に勤しむ生徒の姿も見られました。1日8時間の英語学習を4日間継続するというハードスケジュールでしたが、終始、生徒が笑顔で前向き

に学習意欲に溢れて生活できたのは、常に親身になって接してくれたフィリピンの先生方のおかげでしょう。

授業最終日の夕方には、語学学校の先生方が本校生徒のために、修了式を企画してくださいました。生徒は4日間の学習の努力を表彰され、誇らしそうに晴れやかな笑顔を見せてくれました。

国際社会に目を向けて

語学学校の学びを修了した翌日、私たちは初めて語学学校の外に出て、「DARE DEMO HERO」というNGO団体を訪問しました。この団体は、フィリピン





カンボジア サービス・ラーニング研修

(2014年12月22日~28日実施)



フィリピン セブ島語学研修

(2015年2月1日~8日実施)

今年度よりスタートした「カンボジア サービス・ラーニング研修」。1回目の参加者は、中学生3名、高校生7名、教員3名の13名。現地の小学校・中学校・高校を訪問し、教育ボランティアを中心とした活動をしてきました。

セブ島語学研修を2月1日(日)より7泊8日で行いました。初めて行った研修ですが、1年生から6年生までの生徒45名と、保護者5名が参加しました。

研修を終えて

今回の研修は SATO JAPAN CENTER の佐藤先生をはじめ、現地スタッフの方々に大変お世話になりました。生徒たちの中には初めての海外という者もあり、慣れない食事や気候、言語の壁に戸惑いがありま

したが、佐藤先生やスタッフの皆様の温かいサポートがあったからこそ、大変充実した研修ができたと思えます。研修を終えた際には、佐藤先生から貴重なお話を頂きました。「カンボジア サービス・ラーニング研修に送りだしてくれた保護者の方への感謝の気持ちを忘れずに持ってほしい。そして学んだことをど

う活かすか、何を感じて持ち帰るかは個人の問題であり、これからじっくり考えてほしい。」というメッセージでした。物が無くても笑顔で一生懸命なカンボジアの子どもたち。物と心のバランスが大切であるということ。私たちは佐藤先生が大切にしている「物心一如」という言葉について深く考えていかなければならないと思います。

今回生徒たちは本当に多くの経験をさせていただき、得たものは一人ひとり抱えきれないほどあると思います。感じたことや思いはそれぞれですが、中高生の間にこのような充実した研修ができたことは、本当に素晴らしい体験です。サポートしてくださった皆様、そして私たちを温かく迎えてくれた現地の子供たちに、心から感謝します。この貴重な体験を機に、さらに生徒それぞれがステップアップしてくれることを願っています。

の貧困最下層の子どもたちに教育の場を提供したり、学校に持っていきお弁当を配給したりするボランティア活動をしています。本校の生徒は、施設に来ている子どもたちと昼食を共にし交流しました。交流の最後には、ささやかではありましたが、本校の生徒たちが各自日本から持参したおもちゃを贈呈しました。

次に、施設に通う子どもが実際に住んでいるお宅を訪問させて頂きました。その子の家は危険な高圧電塔の下にあります。違法居住地ではありますが、その子の家族には正規の土地代を支払う余裕はなく、仕方なくその危険な土地に、寄せ集めの家財で暮らしています。生徒たちは、あまりにも自分たちの生活水準とは異なる光景に、少なからずショックを受けていました。生徒にとっては、フィリピンにおける「貧困」という大きな社会問題について考える良い体験

となったことでしょう。今回の研修期間のうち、英語を学んだ4日間はとてもストイックで濃密な学習期間でした。生徒も、英語で考え英語を使う生活に最初は四苦八苦していましたが、後半はとても楽しそうでした。売店やランドリーなどで、現地スタッフと果敢に英語でやり取りするほどまでに成長しました。ぜひここで得た経験と自信を、今後の自身の英語学習に役立て、国際社会に目を向け続ける生徒に育ってほしいと願います。



校訓を考え直すきっかけになったカンボジア研修

5年4組 一宮 まりあ

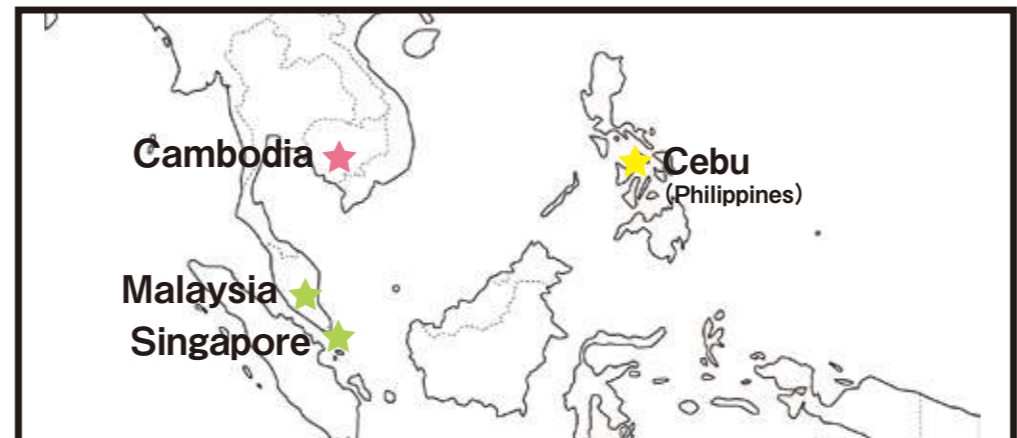
私は小学生の時、タイのチパレ村に行きました。日本の環境とはかけ離れた学校や施設にカルチャーショックを受けましたが、まだその時は校訓「人になれ 奉仕せよ」の意味を考えず、ただ現地の子供たちと楽しい時間を過ごしただけでした。

今回の研修では多くの事を学ぶ事ができたと思います。まず、言葉は通じなくても身振り手振りでも心は通じるという事です。私が担当した毛糸人形作りの交流では、説明しようとしても、日本語はもちろん通じない、カンボジアの公用語であるクメール語も話せない、唯一通じるとしたら現地の先生と私のカタコトの英語、そして身振り手振りのジェスチャーでした。そんな中、私のジェスチャーで皆が人形を作り上げる事ができた時は、本当に嬉しかったです。

また、今回も日本の環境との違いを目の当たりにする時がありました。PHNOM DA 遺跡見学の時、到着するなり案内役としてたくさんの子供たちが出てきました。子供たちは人懐っこくて、とても可愛かったです。でも服装を見ると、靴を履いていない素足の子、洋服が汚れている子はばかりでした。道は未舗装で遺跡は山の上であり、素足で登るのは考えられないと思いました。また子供たちは、キレイな花をたくさん取ってきて私達にくれ



ましたが、最後にスタッフが子供たちにお金をあげると、子供たちは一瞬でスタッフの周りを囲み「ちょうだい」と言うように手を伸ばし、取り合いになっていました。私はその光景を見て、さっきくれた花も「お金をちょうだい」という意味だったのかと思い、少し悲しかったです。かつてポルポト政権に多くの命が奪われたという悲しい歴史を持つカンボジア。子供たちは決して思われているとは言えませんが、皆楽しそうでした。私はカンボジアの子供たちと一緒に楽しく遊び、喜んでくれる姿を見て、とても嬉しく、もっと何かできないか?と考えました。今思えば、それが「奉仕」をするという事への原動力になるのだと思います。今回の研修を通し、私一人では何もできないかもしれないけれど、今回体験した事を一時的な事にするのではなく、この体験で感じた事、思った事を忘れずにこれからも生きていこうと思います。



言葉より大切なコミュニケーションをしたいという意志

3年5組 石塚千尋 (CHIHIRO ISHIZUKA)

I could learn a lot of things in this trip. At first I was worried about one-on-one lesson because I had no one to depend on during the lessons.

Through my experiences in Cebu, I realized that I did not actually learn English until I used it.

The teachers at Bayside school were very kind, so every lesson was a lot of fun for me. During free time, I did not have any chances to meet the KGM students. Therefore, I could make friends with Filipino teachers and other students from Japan.

For me, this training was not tough but FUN! I would like to improve my English communication skills more. This training was a very good experience for me. Thank you for reading.

In fact, during the class, there were only one Filipino teacher and me in the room. But I could communicate with the teachers in English using the grammar which I learned at school in Japan. When the Filipino teachers couldn't understand Japanese, I taught Japanese to them.

I learned it is important to have a will that you want to communicate with people. English is a tool to communicate with others. It means English will not be "useful" without using it.

マレーシア・シンガポール 教育視察旅行 (2015年2月8日～13日実施)



マーキャンなど、本校生徒が参加できるプログラムが充実していました。

また、公立学校 SMK Seaford Secondary School も訪ねましたが、高校生の流暢な英語による案内、すれ違う生徒たちの礼儀正しく笑顔に溢れた挨拶、教職員・保護者・生徒など学校を挙げての盛大な歓迎、すべてが素晴らしいものでした。施設などの面では厳しい環境の公立校ですが、その教育力の高さは今回の研修で最も強く印象に残っています。

大学は、APU (Asia Pacific University) と Newcastle University Medicine Malaysia の 2 校を訪問しました。様々な国籍の学生が集う両校。IT

今回初めて、保護者の皆様4名と共にマレーシア、シンガポール両国を訪問しました。目的は保護者の方々に東南アジアの教育や社会の実情を知っていただくこと、そして、グローバル教育を目指す本校が今後留学先として検討するための教育視察です。大都会クアラルンプールやシンガポール、イスカンダル計画で急発展中のジョホールバルなど、東南アジアの勢いに圧倒され、多民族国家ならではの様々な文化に感動し続けた研修でした。

訪問した international school 3 校 (NILAI, MAZ, NEXUS) はすべてケンブリッジ・カリキュラムを導入しています。イギリス式の格式のある授業を行っており、ICT 教育環境やプールなどの施設も充実していました。何よりも躰の厳しさと生徒の積極性が印象に残っています。NILAI には現在 8 名の本校生徒が留学をしていますが、他の 2 校も留学やサ

に特化した教育環境を整えている APU、最高の医療技術が学べる Newcastle、ともにマレーシアトップクラスの大学です。APU では、日本人留学生 2 名から実際に話を聞かせてもらいましたが、将来を見据えて高い目的意識を持って学ぶ姿に大いに感心しました。

マレーシア、シンガポールは日本との時差が 1 時間、年間を通して気候も安定しています。多民族国家であり、宗教や服装、料理にも民族の特色が見られます。様々な民族の生徒と普段から一緒に学ぶことで得るものは大きいことでしょう。現在留学中の生徒たちが、この貴重な経験を通して大きく成長し活躍してくれことを楽しみにしています。そして今回の研修が、保護者の方々にとって、グローバル社会を意識してお子様と将来について話をするきっかけとなることを願っています。

マレーシア教育視察旅行に参加して 3年保護者 皆川 江里子

「マレーシアは多民族・多宗教の国なので、尊重し合い、融合している。同化ではない。現地ガイドのこの言葉がとても印象的でした。本校教育方針にある「一人ひとりにはかけがえのない存在である」「他の人の存在や人格を互いに認め合う」と通じるものがあります。

子供に何か海外経験の機会があればと思っていたところ、今回の「マレーシアターム留学」は、英語に苦手感のある息子にとってまさにぴったりのプログラムでした。今回の教育視察旅行で留学 1 ヶ月後の彼に会えたのですが、先生方や寮のスタッフが、生徒一人ひとりの性格をよく理解し丁寧に接してくださっており、送り出した親としてもとても安心しました。子供たちが『平和をつくる人』として、大きく成長して帰国することを期待しています。

2年保護者 深瀬 禎光

今回「マレーシア教育視察旅行」に参加しました。我々の世代は留学先といえば「欧米」というイメージがありますが、日本と経済的にも結びつきの強いマレーシアで異文化体験と語学習得が可能ということを今回の視察で実感できました。対日感情も良好で(現地校の歓迎にはびっくり!)、経済成長により街の発展も著しく、就学環境面も費用面も十分に留学先の選択肢になり得ると感じました。

学校で様々なプログラムに参加できる今の生徒たちを、ドメスティック世代の一員としては誠に羨ましく思う一方、これからの時代、どんな仕事でも外国との縁は避けて通れないことは間違いなく、親としては積極的に異文化体験、語学習得に取り組んで欲しいと改めて実感しました。

2015年度英語教育に関する取り組み

～ネイティブ教員による授業を多く取り入れた授業展開～

2015年度、本校では6人のネイティブ教員が英語の授業を担当します。これからの英語力は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能が求められます。グローバル化社会で活躍するためには、この英語の4技能をツールとして獲得することが必要不可欠です。

本校の英語の授業は、低学年からネイティブ教員による授業を数多く展開し、10年後、20年後の社会を生徒たちが生き抜くための英語コミュニケーション能力を獲得して行きます。

また高等学校においても、4年生(高校1年生)の英語会話では1クラスを4人の教員(ネイティブ教員2人・日本人教員2人)で担当して、より発話の機会を増やしたり、6年生(高校3年生)ではネイティブ教員2人によるチーム・ティーチングでの英作文の授業[English Writing]を開講したりと、特色のある授業を展開しています。

学年	クラス	週の授業時間数 6 時間の内訳 ①はクラス単位で授業 ②はグレードによる習熟度別授業					
		1	2	3	4	5	6
1年生	全クラス	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT
	S グレード	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	② ネイティブ教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員
2年生	AB1 B2C グレード	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員
	S グレード	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	② ネイティブ教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員
3年生	AB1 B2 B3C グレード	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員
	S グレード	① ネイティブ教員と日本人教員の TT	② ネイティブ教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員	② 日本人教員

校長先生の メッセージ



関東学院六浦中学校
・高等学校
校長 黒畑 勝男

10年後、20年後の世界を想像することは難しいです。しかし、関東学院六浦は、子どもたちの未来への備えを金沢八景から眺める海の方こうを見つめて考えています。

それは大きく4つ。

1. ASEAN 諸国が猛烈な勢いで経済発展すること。
2. 日本は今まで経験のない少子化が加速すること。
3. ICT と人工知能の発達で、働き方や労働のあり方が想像以上に変化すること。
4. 地球環境の保全が絶対的で普遍的なテーマになること。

どれも大きな課題だからこそ、地球規模に視野を広げて生き方を考え、将来を見つめることが大切。教育姿勢の機軸もそうなるべきと考えています。

より若いうちに、より感受性が鋭くて柔らかなうちに、挑む力を伸ばす教育へのチャレンジ。自分の可能性を見つめるための実践の場と時が、強化される英語教育を背景に、中高一貫の発達段階を考えたプログラムになっています。

